

〔論説・随筆〕

新会長との出会い—その横顔

大橋 秀雄*

もう二十何年も昔の話になります。私が大学の四年生になって、卒論でポンプの実験をやっていたときでした。指導教官だった前会長の白倉昌明先生から呼出しがあり、お部屋にうかがいました。東京高校の先輩で今井兼一郎さんと云う方が数値計算のアルバイトを探していらっしゃる、ついては君やってみる気はないかと云うお話でした。

当時私は、ガリ版の原紙きりだとかあまり知的でないアルバイトばかりやっておりましたので、数値計算と云う耳なれない仕事に興味をひかれ、お引受することにしました。

早速、今井さんのお宅にうかがいました。今は南青山と呼ばれていますが、当時はまだ麻布新竜土町、東大の生産技術研究所の裏手に当たります。

戦火を免れて生き残った英国風の洋館で、そこに今井さん御一家が、御両親や弟さん方と一緒に住んでいました。

1階のダイニングキッチン風の部屋が若夫婦の生活の中心で、そこで今井さんからいろいろ話をうかがいました。学位論文をまとめるべく努力してきたこと、会社の仕事が忙しく、計算が思うように進まないこと、研究テーマは厚肉回転円筒の弾性論に関する事で、端面の境界条件をいろいろに試みながら遠心応力による変形を求める問題を手掛けていること、計算の主体は連立一次方程式を解く作業にあること等々でした。

アルバイト代は、計算にかけた時間に応じて、1分1円とすること、2週間に一度位は計算の進み具合を報告することなどをきめ、1台のタイガー計算機をお借りして家へ戻りました。

タイガー計算機って御存知ですか。片手に乗る

位置割と小型ですが、鉄の塊みたいにずっしりと重く、小さなハンドルを手廻して各桁ごとにセットした歯数を加算する歯車式の計算機のことです。

今でも時折、研究室の片隅で埃をかぶったまま、放置されているのを目にしますが、当時は貴重品でした。私がお借りしたのも今井さんの持物ではなく、当時東大理工研の河村竜馬先生のところからの又借りでした。

暇をみつけては、タイガー計算機をゴリゴリ・チーンと廻す生活が始まりました。連立方程式は10元位だったと記憶していますが、係数にはかなり脱落したところがあり、全体の形を眺めては消去法で求めてゆきました。当時私は姉夫婦のところに居候しておりましたので、夜遅くまで計算するときは、騒音に随分と気も遣いました。計算時間はノートにつけて集計しておきました。

今井さんのお宅に、時々計算の報告にうかがうのが大変たのしみでした。一つには、今井家の空気のせいだったと思います。当時では映画の中でしか嗅ぐことのできなかつた西洋の空気が、今井さんのところではそれが普通のことであるかのようにたちこめていました。そう云えば今井さんはアメリカ生れ、貿易会社の社長をされた父上の文平様は、東大機械の最も古い先輩の一人ですが日本の粋をはずした生活と考え方が今井家の家風となって了ったのでしよう。

奥様や二人のお嬢さんも交えて、お茶を頂きながらの会話も楽しいものでした。今井さんの巧みな比喻を使った辛辣で時にして正直すぎる意見が出ると、奥様はきまって「やーね、兼一郎は…」とあまり嫌そうでもない弾んだ声で対応されるなど、時のたつのを忘れる位でした。

*東京大学

原稿受付日 昭和53年6月27日
原稿入稿日 昭和53年7月3日

次のたのしみは、今井さんが私の作業ノートを覗き込み、上着の内ポケットから財布をとり出しそれまでのアルバイト代を払って下さるときでした。その度に、ポケットマネーとはよく云ったものだをつくづく感心したものでした。

合計すると、今井さんからはかなりの額を頂いたこととなります。当時今井さんは30台の中ばだったと思いますが、自分がその歳になって始めて自前の計算係を一人雇うことがどんなに大変なことかよく判りました。

計算は数ヶ月続きました。今なら簡単な行列計算で済むことですから、電算機にやらせれば、入出力文や宣言文を除くとCALL LIBRARYの僅か一行で片付いて了うものです。時代の移り変りを身に染みて感じます。私の計算がどの位役立ったかは疑問ですが、今井さんは暫くして学位論文を完成し、東大から工学博士の学位を授与されました。

アルバイトだけでしたら、今井さんとの縁もこれでおしまいになるところでした。4年の夏休み中だったと思いますが、今井さんから「石川島に入る気はないか、石川島は発展力のある会社だ」と言われました。その当時今井さんは、石川島に籍を置きながら、三菱、川重、富士重工、プリンス自動車と共同出資の日本ジェットエンジン株式会社に出向し、国産ジェットエンジンJ3の設計に没頭していました。就職のことについては全く白紙だった私は、今井さんがそう言うのならばと入社試験を受け、卒業と同時に石川島重工業株式会社に入社しました。当時の社長は土光さんでした。

私は、船用ガスタービンの設計をする課に配属になりましたが、注文の方はさっぱりで、その日に備えて勉強ばかりしておりました。いっそのこと留学して勉強しようと西ドイツの留学生試験を受けたところ、まぐれ当り、在籍のまま、2年間ブラウンシュバイク工科大学に留学しました。帰国後一年ほど働いた後、退社して東大の機械に講師となって移りましたので、石川島には結局在籍5年、実働3年と云うこととなります。

その間、私は職制の上で今井さんの指揮下に入る機会がありませんでした。したがって今井さんとは、私的な関係しか持ち得なかった訳です。

ラインのヘッドとしての今井さんはどんな人だろうか、私にも大いに興味があります。ちなみに現職は航空宇宙事業本部長で、要するにジェットエンジンとロケットの最高責任者です。幸いクラスメートの一人が今井さんの下にいますので聞いてみました。

厳しいそうです。どんな風に厳しいのかと云うと、理想をはっきりと掲げて、そのためにはどうあるべきか常に問われるからだそうです。とかく対症療法的な“どう処置すべきか”で日々を追われ勝ちですが、それだけでは駄目だそうです。

いささか抽象的な表現ですが、成程と判る気もしました。いつも根元に立ち帰る心のゆとりを、私も前々から感じておりました。

今井さんは、学者を大切にしてください。大学のことや学会のことなどで会社に何かお願いしなければならぬとき、今井さんに頼めば大丈夫だと皆さん言われます。そして、確かにその通りだったと云う経験をお持ちの方が多し筈です。

今井さん自身、大学に残ろうか、実際の生産の場に立とうかとさんざん迷われたあげく、現在の道を選ばれた方ですから、大学の事情などにもよく通じておられます。このような方が、産学の接点である学会で貴重な存在であることは云うまでもありません。日本機械学会を始め、航空宇宙学会や日本ガスタービン学会で要職を分担してこられたことは御承知の通りですが、此の度当ターボ機械協会の会長をお引受け頂いたのは、協会の発展のために大変良かったと思っております。

協会の前途は決して平坦なものとは思えませんが、産学が和を以て協力し、不滅の原理に立脚するターボ機械の理想を追い求めてゆけば、道は自ずと開けてくるに違いありません。松波会長、白倉会長に引続き、新会長の強力な指導を期待して止みません。

本年5月12日に行なわれた総会後の懇親会の席上、新会長との出会いについて、昔話を御披露したところ、会誌にも掲載するよう編修理事から強いお薦めを頂きました。いささか私事に亘ることばかりで申し訳ございませんが、新会長の素顔の一端でもお伝えできればと思って筆を執りましたのでお許し願います。